第4回ユネスコスクール関東ブロック大会　報告書

ユネスコスクールの3つの柱

開催日：　2023年7月30日（日）

主催：　東海大学

共催：　かながわユネスコスクールネットワーク（KAN）/
成蹊大学 / 創価大学 / 玉川大学 /
CRI- チルドレンズ・リソース・インターナショナル

協力：　公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）

後援：　ユネスコスクール支援大学間ネットワーク（ASPUnivNet）

unesco
Member of
the Associated Schools
Network

目次

2 当日プログラム
3 ユネスコスクールの 3 つの柱
4 ユネスコスクールに求められる 3 つの重点課題を学ぶ
5 ユネスコスクール定期レビューの導入と新しい加盟申請の方法について
7 「ユネスコスクールの 3 つの柱」実践報告
8 横浜シュタイナー学園
10 森のようちえん めーぷるキッズ
12 横浜国立大学教育学部附属鎌倉小学校
14 横浜市立幸ヶ谷小学校
16 横浜市立南吉田小学校
18 大妻中野中学校・高等学校
20 湘南学園中学校高等学校
22 グループワークと各グループからの発表
24 パラレルイベント　ユースミーティング
25 UNESCO ユースセミナーってなに？
26 ポスター展示・コーナー展示・動画上映など
27 ムーブメントとしてのシュタイナー
28 第 4 回ユネスコスクール関東ブロック大会の振り返り
30 神奈川・関東ブロックにおける地方大会やユースセミナーの歩み
31 2024 年度「第 5 回ユネスコスクール関東ブロック大会」予告

2023 年
7 月 30 日（日）

当日のプログラム

10:00 開会のご挨拶
「ユネスコスクールに求められる3つの重点課題」
東海大学児童教育学部学部長　山本 康治

10:10 **「ユネスコスクール定期レビュー（評価）の導入と新しい加盟申請の方法について」**
ACCU 教育協力部　藤本 早恵子

10:30 **持続可能な開発および持続可能なライフスタイル**　環境教育

横浜シュタイナー学園
人と自然の営みが循環する里山環境保全の学びから地球規模の循環の学びへ

森のようちえん めーぷるキッズ
感じる（feeling）ことを通して学ぶ幼児教育

横浜国立大学教育学部附属鎌倉小学校
食育から取り組む ESD（持続可能な開発のための教育）

11:30 グループワーク

12:10 昼食・ポスターセッション

13:00 **異文化学習および文化の多様性と文化遺産の尊重**　国際理解教育・多文化教育

横浜市立幸ヶ谷小学校
ルワンダとの交流、地域のインターナショナルスクールとの交流

横浜市立南吉田小学校
多文化共生の学校づくり

13:40 グループワーク

14:20 休憩

14:30 **地球市民および平和と非暴力の文化**
平和・人権・ジェンダー平等教育

大妻中野中学校・高等学校
チームプロジェクト型の地球市民教育
～学ぶ・つなぐ・行動する

湘南学園中学校高等学校
中高生からの呼びかけ「生理を知ろう」
～生理を通して多様性の理解へ

15:10 グループワーク

15:50 グループワークからの発表

16:50 閉会のご挨拶

ユネスコスクールの 3 つの柱

ユネスコスクール（ASPnet）は、世界 182 ヵ国から 12,000 校以上の学校が参加する国際的なネットワークです。幼保小中高の学校や教員養成系大学、その他のインフォーマル教育機関が参加して、ユネスコと連携して「人々の心の中に平和の砦を築く」ための革新的で創造的な教育への取り組みを生み出しています。取り組みの成果をユネスコスクール間で共有し、さらに地域の学校へ伝えていくことがミッションです。

2016 年に SDGs がスタートしたことで、ユネスコスクールの果たす役割がますます重要視されます。2018 年、ユネスコは各国の ASPnet コーディネーターのための『ガイド（手引き）』を発行し、SDG の 4 番目の目標「すべての人に質の高い教育を」に沿った新しい指針を提案しました。この目標の中でも、ユネスコスクールにとって特に関係があるのが 7 番目のターゲット（SDG-4.7）です。

『ガイド』の新しい指針の中で明示されたのが、右の「3 つの柱」です。どれか一つのテーマに取り組めばいいという意味ではなく、3 つのテーマすべてにバランスよく取り組むことがユネスコスクールには期待されます。

1. 地球市民および平和と非暴力の文化
Global citizenship and a culture of peace and non-violence

2. 持続可能な開発および持続可能なライフスタイル
Sustainable development and sustainable life style

3. 異文化（インターカルチュラル）学習および文化の多様性と文化遺産の尊重
Intercultural learning and the appreciation of cultural diversity and heritage

「ユネスコスクールの目的と活動テーマ」については、ユネスコスクール公式ウェブサイトの「ユネスコスクールについて」を参照してください。

ユネスコスクール 公式ウェブサイト
「ユネスコスクールについて」
https://www.unesco-school.mext.go.jp/about-unesco-school/aspnet/

『ガイド』のオリジナルは以下より
UNESCO (2018).
UNESCO Associated Schools Network: Guide for National Coordinators, p.14
https://unesdoc.unesco.org/ark:/48223/pf0000261994

ユネスコスクールに求められる 3つの重点課題を学ぶ

東海大学児童教育学部学部長　山本康治

東海大学では、五十余年の伝統のある短期大学教育学部を 2022 年度に静岡キャンパスから湘南キャンパスに移し、4 年制大学の児童教育学部を新設しました。乳幼児期の保育・教育から小学校教育まで幅広く学び、保育士資格、幼稚園、小学校の教員免許を取得できる学部として、これからの日本の教育を背負ってたつ若者たちを育てています。

環境教育、多文化教育、人権教育というユネスコスクールの「3 つの柱」につながる課題は、大学全体の教育にとってとても重要なテーマですが、特に児童教育学部では、これから教員・保育者となる若者たちがそれらを子どもたちに伝えていく力を育てなければいけません。関東圏、日本、そして世界のユネスコスクールの交流の輪に加わることで、それらの実践について学び、具体的にどのような教育活動に落とし込んでいったらいいか、これから皆さんと一緒に研究していけることをとても楽しみにしています。

今回の「関東ブロック大会」では、長年の経験を積んでこられた発表者の皆様の実践から学ぶと同時に、ワークショップ形式のグループワークを通じて、顔の見える交流ができたことを大変嬉しく思います。ASPUnivNet のメンバーとして、これからも皆様と親しく交流し、ユネスコスクールの教育実践の発展のために総合大学としての東海大学の特徴を活かしてご協力させていただければ幸いです。

ユネスコスクール
公式ウェブサイト
「加盟申請方法」

ユネスコスクール定期レビューの導入と 新しい加盟申請の方法について

ACCU 教育協力部　藤本早恵子

ACCU は文部科学省の委託を受け、2008 年よりユネスコスクール事務局を務めています。昨今、SDGs への関心の高まりを受けてユネスコスクールへの期待はますます高まっており、「持続可能な社会の創り手の育成」を先導する役割が求められています。

そのような背景のもと、ユネスコスクールの活動の質の担保を目的として、2022 年度からは、新規で加盟申請する場合の方法にも変更が加えられました。大きな変更点は以下の 2 点ですが、今回の大会では、それらの変更点についてご説明するとともに、会場に相談コーナーを設け個別の質問にもお答えいたしました。

加盟申請の方法が 変わりキャンディデート 期間が設けられました

加盟希望校には、原則 1 年間以上、ASPUnivNet の助言を得つつ、ユネスコスクールガイドライン等に沿った活動を実施し、その間の活動報告書を提出していただくこととなりました。国内審査において基準を満たすと判定された学校は、ユネスコスクール・キャンディデートとして承認され、その後、正式にユネスコ本部への加盟申請手続きを実施します。

加盟後は原則 5 年に 一度の「定期レビュー」 を実施します

加盟校に対しては「ユネスコスクール定期レビュー」が導入され、原則 5 年毎に活動チェックシートを基に自己評価と相互レビューを行っていただくことになりました。有識者による助言や加盟校間の意見交換等を行うことで、各加盟校の活動の質を担保するとともに、ネットワークの強化や ESD の推進を図ることを目的としています。レビューは以下のようなステップで実施されます。

（1）加盟校による自己評価及び有識者による書面レビュー
（2）研修会への参加及び有識者からの助言
（3）中期活動改善計画の作成・提出（対象校のみ）

ユネスコスクール事務局では、皆様の声に耳を傾け、今後もさまざまな支援を提供していきたいと考えています。ぜひ身近な存在として活用していただければと思います。

会場風景（第１会場）

会場風景（第２会場）

ユースミーティング

ユネスコスクールに期待される
取り組みの「3 つの柱」とは、
現場の教育にとって具体的に
どのような活動をいうのでしょうか?
それぞれの学校で、
3 つの柱をバランスよく教育活動の
中に反映させるためには
どんな取り組みができるでしょうか?
本大会では、ASPUnivNet や
「かながわユネスコスクールネットワーク（KAN）」
からの推薦を受けた
グッドプラクティスの実践から学び、
参加者同士で意見を
交換し合う機会をもうけました。

実践報告をしていただいたのは7つの学校。
第 1 の柱「持続可能な開発および
持続可能なライフスタイル」については、
環境教育に取り組む2校のほかに、
特別課題として「食育」への取り組みの
発表も加えました。
第 2 の柱「異文化学習および文化の
多様性と文化遺産の尊重」については、
海外の子どもたちとの交流を通じた
国際理解教育のほかに、
学校そのものの多文化共生の
取り組みについても報告していただきました。
第 3 の柱「地球市民および
平和と非暴力の文化」については、
2つの中高一貫校から、
有志の生徒さんによる課外授業・
自主活動の報告をしていただきました。

「ユネスコスクールの3つの柱」実践報告

持続可能な開発および持続可能なライフスタイル
（環境教育）

横浜シュタイナー学園
人と自然の営みが循環する
里山環境保全の学びから
地球規模の循環の学びへ

森のようちえん めーぷるキッズ
感じる（feeling）ことを通して
学ぶ幼児教育

横浜国立大学教育学部附属鎌倉小学校
食育から取り組む ESD
（持続可能な開発のための教育）

異文化学習および文化の多様性と文化遺産の尊重
（国際理解教育・多文化教育）

横浜市立幸ヶ谷小学校
ルワンダとの交流、地域の
インターナショナルスクールとの
交流

横浜市立南吉田小学校
多文化共生の学校づくり

地球市民および平和と非暴力の文化
（平和・人権・ジェンダー平等教育）

大妻中野中学校・高等学校
チームプロジェクト型の
地球市民教育
～ 学ぶ・つなぐ・行動する

湘南学園中学校高等学校
中高生からの呼びかけ
「生理を知ろう」
～生理を通して多様性の理解へ

https://www.unesco-school.mext.go.jp/schools/list/yokohama-steiner-school/

横浜シュタイナー学園

創設：2005年　運営母体：NPO 法人横浜シュタイナー学園
ユネスコスクール認定：2011年

人と自然の営みが循環する里山環境保全の学びから地球規模の循環の学びへ

横浜シュタイナー学園は「里山環境保全」を中心テーマとして発表しつつ、小学校1年生から中学3年生までの学習を貫きながら、「持続可能な開発および持続可能なライフスタイル」へと自ずと統合されていく、横浜シュタイナー学園のサステイナブルな学習体系の一端を紹介しました。

「新治市民の森」での人と自然の営みが循環する里山保全の学び

横浜シュタイナー学園の園芸専科は6、7、8年生で週に1回あります。子どもたちは、6年生頃から物事の因果関係が理解できるようになり、物言わぬ植物や鉱物に親しみを持てるようになります。7年生は、第二次性徴期を迎えて身体も大きく重くなり、体力も付いてきて、しっかり身体を動かす作業ができるようになります。この時期に、目覚めた意識と全身を使って、生きて変化する植物に関わり学ぶ時間が必要なのです。

園芸専科では、校庭で土づくりから野菜栽培をしたり、「私の木」の観察やお世話などを行います。8年生では、行政との連携のもと、近隣の公園での花壇整備、美化活動などの地域貢献を通して、社会を変える一歩を生み出す活動も行っています。

加えて、里山保全のNGOのご協力により、7年生の里山保全体験活動がスタートしました。「新治市民の森」は、横浜市北部で唯一まとまって残された森（約67ha）で、「最後の森」「奇跡の森」と言われています。ここには、人と自然の営みが循環している横浜の原風景があります。地域市民活動が大変活発に行われており、豊かな森が保たれて私たちが学べるのは、保全活動をされている方々のお陰様なのです。

この森を美しく保つためには、どんな作業が必要なのか？　地域の方々はどんな活動をしているのか？　子どもたちに、身体と心を使って学んでほしい、そして、保全作業ありきではなく、森が美しく豊かであることを身体と心でしっかりと感じることを学びの中心に据えることにしました。

7年生の森の田んぼの作業では、靴下で入った生徒たちが「おおおお!!」「気持ちがいい!」と、畔の修復作業「黒付け」作業を行いました。鍬で畔を削り、田の泥と混ぜて、畔の穴を埋め、美しく塗り直す作業です。貯水機能が保たれ、田んぼの生態系も保たれることになります。

6月の夏至の日に行った生物観察と田の草取りの作業は、田んぼの生き物を網でとることから始まりました。網ですくうと、その度に、オタマやカエル、ドジョウなどが入り、生物が豊かに暮らしていることが感じられました。

9月下旬から10月上旬には、稲刈りがあり、お米も頂きました。

秋には森の保全活動に取り組みました。竹は全国の里山の厄介者ですが、この森でも雑木林に成長の早い竹が増殖しています。チームに分かれ、地域の愛護会の方から竹を切る意義や方法を教えてもらいながら、切り始めます。斜面地での作業を長時間行い、10本以上切ったチームもありました。ご高齢の方が多い愛護会の方々からは、若い力が有難いと何度も感謝の言葉を頂きました。切った竹は十分に水分が抜けた後、真冬の1月に竹炭作りの準備と見学を行いました。

炭焼き小屋の見学では、竹炭焼きの煙の匂いを感じ、竹酢液のできる様子を見ることが出来ました。燃焼の様子やできた後の炭の使い方なども丁寧に教えていただき、作業されている愛護会の方の姿からは里山保全活動への熱い思いが伝わり、子どもたちの中に強く残ったと思います。

以下、新治市民の森における里山環境保全の学びの実践例をまとめます。

- 谷戸田周りのセイタカアワダチソウ駆除（2021年9月）
- 旧奥津邸の柱を谷戸田の米ぬかで磨く（2022年1月）
- 谷戸田の黒付け（畔塗り）作業、岡の稲代の除草（2022、2023年5月）
- 谷戸田での生物観察、田の草取り（2023年6月）
- 谷戸田での稲刈り（2022年10月）
- 竹林での竹の間伐（2021、2022年1月）
- 竹の間伐材を使った竹炭作り見学、竹割りや節取り（2022、2023年1月）

セイタカアワダチソウの駆除は、その一年後にもあまり生育が見られず、今後も生育が見られるときにはお願いしたいと言われました。市民団体の方々はご高齢の方が多く、中学生の体力、集中力、根気をもって作業する様子に、何度も感謝の言葉を頂きました。生徒からは、いつも身近にあった里山にたくさんの生物が住んでいることが分かり驚いたという感想や、作業することで森に変化が起こることが分かり嬉しかった、もっと作業をやりたかったという感想が出ました。

このような学びは、一朝一夕に実現できたわけではなく、学園の創立から20年近くかけて、クラス担任や事務局長らが地域のNPO、NGO、行政などとの関係を紡いできたからこそ可能になったものです。また、担任だけでなく、地域の活動団体と学校を繋ぐコーディネーター、インターミディエーターの存在が重要だと感じます。里山の活動においては、園芸専科教員が間に入りましたが、新治市民の森の活動団体では、横浜シュタイナー学園の何人もの保護者が活動を担っていて、双方向ないしは多方向からの繋がりが出来てきたからこそ、「学園」、「それぞれの活動団体」、「自然」への「三方良し」の活動が出来たのだと思います。

これらの活動を通して、私たちは決して無力ではないことを感じとってもらえたらと思っています。子どもたち自らの意志で行動を起こすためには、こうあってほしいと語るだけでなく、周りの大人が行動することで、自分たちの行為で世界が変わることを示していきたいです。

〔園芸専科教員　和久井千世子〕

学年を超えて貫くサステイナブル・マインドを育む有機的カリキュラム

和久井の「里山環境保全」の発表の後、その内容を引き継いで、それが単学年の学びで終わらないことを説明しつつ、長井が早足でまとめました。

3年生の通年の学びのテーマとして、「くらしと仕事」があります。自我が目覚め始める9才に差し掛かった子どもの内面では、それまで当たり前だと感じていた自分と世界は一体だという感覚に揺らぎが生じます。

そのような子どもたちに「大丈夫。この世界は喜びに満ちています。困難はあっても、手足を動かし、先生や仲間と一緒に活動していけば乗り越えられるし、内と外の区別もつくようになるんだよ。」というメッセージを伝えることがこの学びの大きな目的です。

学園では、里山に近いことを利用した「米作り」を、6期生からこの「くらしと仕事」に取り入れています。米作りが1年を通して学びに浸透し、自分の手で食べものを生産できたという嬉しい体験に加えて、収穫した稲わらを家づくりの屋根に葺くことができ、その家を解体した後は、堆肥として再び田や畑の土に還ることを通して、田んぼのある暮らしの豊かさに気づきます。こうした体験が9才の節目を健やかに越えていくための原動力となります。

9歳を過ぎると「前思春期」「思春期」の節目がやって来ます。その時期に、園芸や農業実習を通して子どもたちは再び大地に触れる学びを体験します。9年生（中学3年）になると、それまでに体験してきたことのすべてが、歴史や化学など教科の有機的な繋がりの中で、一つにまとまり、地球環境を守りたいという思いが自ずと生まれてきます。

これが、ユネスコスクールの「三つの柱」の二番目、「持続可能な開発および持続可能なライフスタイル」に繋がっているのです。

〔4年生担任　長井麻美〕

https://maplekidsmoana.com

森のようちえん　めーぷるキッズ

創設：2009 年
ユネスコスクール認定：2022 年

感じる (feeling) ことを通して学ぶ幼児教育

世界の教育研究の中でも一番注目をあびているのが "Starting Strong（乳幼児教育）" であるように、環境教育も同じく乳幼児教育からはじめることが極めて重要です。運営母体である NPO 法人「もあなキッズ自然楽校」では、森のようちえんという自然環境を活かした保育を実践しており、ヒトや植物や生き物と向き合い、五感を使って日々感じ、学んでいます。その日々感じる実践の積み重ねがやがて畏敬の念や平和を考える人間になっていくことの意味深さをお伝えしました。さらに、もあなキッズでは、2020 年より「100 年先を見つめる保育園プロジェクト」をキャンペーン中！その詳細をお伝えさせていただきました。

森のようちえん めーぷるキッズの設置法人である NPO 法人もあなキッズ自然楽校では、2007 年の創設以来、「子どもへの健全育成活動」と「持続可能な社会つくり」という 2 つの軸を理念として、活動をおこなってきました。特にこの 10 年は、「森のようちえん」という乳幼児期の子どもたちを対象に毎日自然公園にでていき、五感を研ぎ澄ませ植物や動物など周囲の自然環境を感じることを通して、自ら多くを学んでいる活動をおこなっています。

世界ではアマゾンや東南アジアの木々は未だ伐採され続け、気候変動危機をはじめとする問題が激化し、人間そのものの存続の危機さえ感じられるようになってきました。しかし、日本の教育において ESD の推進をおこなってきていますが、ESD が教育の深部に刺さっているとは言い難いと考えます。では、どうしたら本来の ESD が成就するのか、その手がかりは、『センスオブワンダー』の著者であるレイチェル・カーソンの一節に解決の糸口があると考えます。

子どもたちが出会う事実のひとつひとつが
やがて知識や知恵を生み出す種子だとしたら
様々な情緒や豊かな感性は
この種子を育む肥沃な土壌です。
幼い子ども時代は、この土壌を耕す時です。

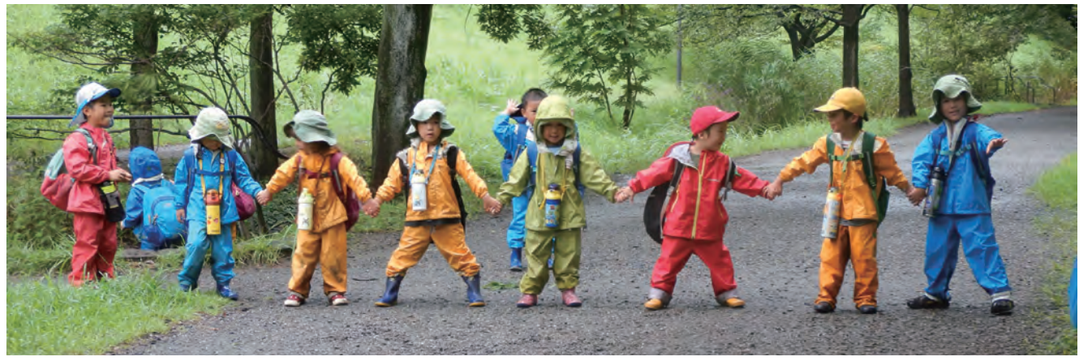
上記は、ESD 実践は乳幼児からはじめることが大切であり、その時代の子どもたちには、「知識を教える」ということよりも、はるかに「感じる」ことから始めることに重要な意義があると考えます。そういったことから、ESD 実践を成就させるべく 2022 年ユネスコスクールに認定されました。

さらに、もう一つ ESD を成就させる上で大切なことは、単発な活動やプログラムではなく、日常の生活の中に埋め込まれている必要があると考えます。私たちの実践は、一般的な保育園という枠組みの中で、日々実践を積み重ねており、園から徒歩 5 分くらいにある広大な自然公園の中で、生活に埋め込まれた保育実践をおこなっています。この「日々の生活」の中で、子どもたちは季節によって移りかわる自然環境の中、植物や生き物と出会い、周囲にあるすべての自然環境とのかかわりの中で、感性豊かに育っています。この生活に埋め込まれた ESD 実践の積み重ねは、いずれ大人になっていくプロセスの中で、畏敬の念や平和への思いを作り出すための源になると考えます。その証拠に、乳幼児の子どもたちであっても、生き物の命と向き合い、感じ、死生観を味わっています。また、わずか1歳数か月の子であっても他者をケアすることがあります。ある 5 歳児の実践エピソードでは、戦争の悲惨さを語り、思わず「てっぽうではなくて、水でっぽうにしたらいいのに」と平和への糸口を探ろうとさえします。しかし、一般的には、この時期の子どもたちに何かを教えようとしますが、森のようちえんの実践では、自ずから関心あるものに開いていき、「センスオブワンダー」すなわち驚きや不思議なことの体験を繰り返していきます。

この森のようちえんのような、子どものやりたいことにフタをせず、感性豊かに育った子どもたちは、どのような職種について、どのような大人になるという確証はありません。しかし、過去に卒園した子どもの中では、高校生になって「未来は自分でかえるもの」と考え、ごみ問題を解決するための学生団体を立ち上げた子もいます。私はそういったことは偶然起こりえたことではないと思います。上記の事例は、乳幼児から感じることを通して学ぶことを積み重ねてきたプロセスの中で現れ出た 1 つの形であると私は考えます。

最後に、この乳幼児からはじめる森のようちえん実践とそのプロセスが、小学校以降のユネスコスクール実践とのつながりをもち、一貫した教育実践になることを試み、100 年後の社会を見据えていきたと考えます。

〔森のようちえん　めーぷるキッズ　園長
NPO 法人もあなキッズ自然楽校　理事長　関山隆一〕



https://www.kamakurasho.ynu.ac.jp

横浜国立大学教育学部附属鎌倉小学校

創設：1875 年
ユネスコスクール認定：2013 年

食育から取り組むESD
（持続可能な開発のための教育）

本校では「給食」を通して、心身の健康づくりに必要な食習慣を身に付けるだけでなく、これからの地球環境を守っていくための知識が学べるように「食育」を推進しています。
給食の食材は、環境に負荷をかけないようにして作られた食材をなるべく選ぶようにし、食事のバランスだけでなく行事食や郷土料理、世界の料理等、食文化の伝承にも力を入れています。また、校内の畑で作物を育てる活動、給食の残渣や残菜をコンポストで堆肥を作り資源化する活動なども行っています。
これらの活動を通じ、健康の大切さや、感謝の気持ち、持続可能な社会への取り組みなど、子供たちが食事を通して様々な繋がりについて主体的に捉えていってほしいと考えています。子供たちが、未来を生きていくために必要な力を養えるような「食育」を目指しています。

1．附属鎌倉小学校の食育

毎日 670 食を自校式・直営にて提供しております。

給食物資の選定基準は、国産・旬・非遺伝子組み換え・無添加・昔ながらの伝統製法で作られているもの・オーガニック･フェアトレード･プラントベース等です。「何を作るか」と同じくらい「何で作るか」という視点も大切にしており環境に負荷をかけないようにして作られた食材をなるべく選ぶようにしています。

献立の内容は、食事のバランスだけではなく、子供たちが考案した給食、まごわやさしい（*）給食、行事食、郷土料理、世界の料理、フェアトレード給食…等様々取り入れています。健康的な食や、食文化などを子供たちが食べながら学べるよう意識して作成しています。

また、主食と副食（飲用牛乳以外）には、特定原材料 8 品目中「卵・乳・エビ・カニ・そば・落花生・くるみ」の 7 品目を使用していない献立にし、より多くの食物アレルギーを持つ子供が同じものが食べられるよう意識して献立を立てています。

2．子供たちの学習と食育

小学校学習指導要領の中から、食育とつながりのある内容に合わせた給食を作り、子供たちの学びがより深まるようにしています。

例えば、3 年生国語科の「すがたをかえる大豆」を学習するタイミングに合わせ、大豆・大豆製品を多数取り入れた給食を作っています。学級担任と栄養教諭が実践する授業では、本物の食材を用い、大豆がどのような工程を経て変化していくのか確認していきます。

4 年生総合的な学習の時間では、究極の小松菜を育てることを目指して取り組んでいます。給食の食材に使用している有機農家さんの畑に見学に行ったり、校内で栽培収穫した小松菜を校門前で販売（収益はユニセフへ寄付）したりしています。

5 年生社会科の「稲作」を学ぶ機会では、葉山の棚田米から作られた「葉山アイス」を給食で提供しています。3 年生社会科「働く人とわたしたちのくらし」においても、子供たちの希望により、葉山アイスの生産者の方にインタビューをしました。

3．Farm りんどう（有志保護者による畑の活動）

週に 1 度、保護者が校内の畑で作物を育てる活動を行っています。育てた作物は給食に使用して全校でいただき、食を通じて家庭と学校がつながる場となっています。子供たちが自然と触れ合う体験から、五感で命のすばらしさや大切さを体験してほしいという考えのもと、食農教育の普及と発展に寄与していきたいです。

4．コンポスト

中庭のコンポストでは毎年、給食の調理残渣と残菜を約 4 トン堆肥化しています。「堆肥は、子供たちの栽培活動や校内畑へ利用 → 畑の収穫物は実際給食に使用し喫食 → 給食の調理残渣と残菜が再びコンポストへ」と、校内で資源が循環するようになりました。コンポストが学校にあることで、生活科、理科、社会科、家庭科、Farmりんどう、附属中学校の技術科などの活動に関わりが生まれ、教科や学年を超えたつながりと、資源の循環をすることができています。ゴミ処理代も年間約 15 万円削減することができ、作物を育てるために購入していた肥料も購入する必要がなくなり経費の削減にもなっています。コンポストの取組は環境省主催、2023 年「環境教育・ESD 実践動画 100 選」に選定されました。

3 年生国語科「すがたをかえる大豆」授業

4 年生総合「給食物資契約の有機農家見学」

5 年生社会科「稲作」

葉山の棚田アイス
児童の学区である葉山の棚田で収穫されたお米で作ったプラントベースアイスを提供。提供日当日は、生産者の方をゲストティーチャーにお迎えして 5 年生の授業へ。別の日には、3 年生の子供たちが生産者の方を訪ね棚田へインタビューへ。

アイスの売上の一部は棚田保全活動に寄付
環境省グッドライフアワード「実行委員会特別賞／森里川海賞」を受賞

Farm りんどう（有志保護者による畑を通じた PTA 活動）

5．まとめ

ESD は、持続可能な社会の創り手を育成し持続可能な開発目標を達成するため、質の高い教育の実現に貢献するものであり、身近なところから行動を開始し、学びを実生活や社会の変容へとつなげることが本質といわれています。

給食は、子供たちと教職員のほぼ全員が喫食します。日常的に食べる身近な給食を「食育」を学ぶための生きた教材として扱うことは、学校全体として ESD に取組むこと = ホールスクールアプローチの実現に繋がると同時に、どのような食を選ぶかにより SDGs のゴールが達成に貢献できると考えます。

日本の自給率や不安定な世界情勢を鑑みると、毎日の食事が心配なく食べられることは、当たり前ではありません。毎日、食事ができるということは、生活していく中で 1 番の安心につながるのではないでしょうか。その安心感が、ユネスコ憲章前文にある「平和のとりでをつくる」基盤のひとつになるという考えを大切にしながら、これからも食育を推進していきたいです。
*食育活動を SNS にて紹介しているので QR コードよりご覧ください。

〔栄養教諭　望月佐知〕

横浜国立大学教育学部附属鎌倉小学校　沿革と教育目標

横浜国立大学教育学部附属鎌倉小学校は 1875 年に創設されました。

「自立に向けてたくましく生きる～夢ふくらませ、心あたたかく、力あわせる～」という教育目標を掲げ、歴史ある鎌倉の土地で、山や海の自然に囲まれながら子供の思いや願いを大切に教育活動に励んでいます。

教育基本法、並びに、学校教育法に基づいて、初等教育を行うほか、「横浜国立大学教育学部並びに大学院教育学研究科と連携し教育の理論と実践に関する研究及び実証をする」、「横浜国立大学教育学部附属学校として学生教育を行う」、「県内外の教育機関に成果を発表し教育現場に寄与する」ことを使命としています。

＊まごわやさしい
健康な食生活を送るための食材の頭文字の語呂合わせ。「ま…まめ」、「ご…ごま」、「わ…わかめ（海藻）」、「や…やさい」、「さ…さかな」、「し…しいたけ（きのこ）」、「い…いも」の頭文字をつなげたもの。

横浜国立大学
教育学部附属
鎌倉小学校食育の
公式 Instagram

https://www.edu.city.yokohama.lg.jp/school/es/kohgaya/

横浜市立幸ケ谷小学校

創設：1929 年
ユネスコスクール認定：2013 年

ルワンダとの交流、地域のインターナショナルスクールとの交流

本発表ではルワンダと交流を進めた「アートマイルプロジェクト」の様子と、地域のインターナショナルスクールとの交流を中心に、6 年生の子どもたちが SDGs の 10 番目の目標「人や国の不平等をなくそう」をどのように受け止め、変容していったかを伝えます。プロジェクトでは、ルワンダと交流を重ねて 1 枚の壁画を完成させました。また、地域のインターナショナルスクール「ホライズン」との交流では、地域のゴミ拾い活動を進めました。こうした二つの取り組みを中心に、子どもたちは自分たちができることを考え、ユネスコスクールの意味についても考えを深めていきました。当日は、現在もユネスコスクールの中学で学んでいる二人の卒業生や、ルワンダの現地からプロジェクトに協力してくださった竹本栞（JICA海外協力隊）さんも発表に参加しました。

ジャパンアートマイルプロジェクトの取り組み

昨年度、6 年生として在席していた児童たちが、一般財団法人「ジャパンアートマイル（*）」とおこなった学習について報告しました。海外の子どもたちとオンライン学習の交流を重ね、1 枚の壁画を完成させるプロジェクトです。プロジェクトでは、アフリカのルワンダの「ウムチョムイーザ学園」の生徒と交流することになりました。子どもたちは、遠く離れた異国の子どもたちと交流を重ね、リフレクション（より深い振り返り）を深めていきました。

> ルワンダの人たちは、バスの中で沢山の人と歌ったり、みんなでカメラを見るとピースをしたり、とても明るくて元気なのが驚いた。バスの中でみんなと歌を歌うなんて、日本ではありえない光景だな、と思った。虐殺とか、貧困というイメージがつよかったけど、今日の交流でイメージがすごく変わった。

当初、その国の存在そのものも知らなかった子どもたちは、調べ学習を進めることで、アフリカの真ん中に位置する国であること、経済成長が著しいこと、内戦の歴史があることなどを知っていきます。さらに、交流を通じてその国の印象が変わっていきます。バスにのっているルワンダの人たちが、突然みんなで歌いだす映像や、ルワンダの小学生たちが生き生きと話し笑っておどける姿を見て、子どもたちは驚いたり安心したりしたようでした。

SDGs の視点で学習を見直す。

特に心を揺さぶったのが、ルワンダの子どもたちが貧富の格差や内戦の歴史を背負っていることでした。ストリートチルドレンであったり、家族に内戦の歴史を背負っていたりする人もいました。そうした体験をへて、改めて日本で暮らす自分たちとの違いを知り、自分たちにできることがないか考える気運が生まれました。

こうした変化をとらえて SDGs の視点で学習を見直したところ、子どもたちは SDG-10「人や国の不平等をなくそう」が自分たちの学習に重なることに気づきます。SDGs という言葉は知っていても何か遠い存在でしたが、実は自分たちが取り組んでいる学習そのものであることに気付いたのです。SDG-10 という視点が定まったことで、交流は、単なる自己紹介の繰り返しから、自分たちの国に存在する差別や不平等の問題を取り上げた交流に変化します。

クラスの子どもたちは、障害や性などの差別や不平等の問題を取り上げ、自分の考えを伝えました。ルワンダの子どもたちは、貧富の差の問題を取り上げ、食事や家、健康にまで差が生まれることを取り上げました。小グループに分かれての交流がうまくいくか心配しましたが、子どもたちは翻訳アプリを使ってどんどん意見を交換していきます。

ある児童は、リフレクションをこう綴っています。

> 最初は緊張したけど、自分の意見が伝わると、よくうなずいてくれていて、その姿を見てほっとしました。日本とちがってルワンダの人たちは、学校や病院に通える、通えないとか、家に住める、住めないとかを取り上げていて、不平等の問題なのだと気づきました。日本では、当たり前にできていることが、できていない人がいることがわかり、おどろきました。

相手の意見をもとに、違いを見出し、自分たちの生活に目を向けているのがわかります。こうしたリフレクションをもとに、クラスの子どもたちは自分たちにできることを問い、行動に移していきます。

子どもたちが驚いたことの一つに、ルワンダには満足に文房具が揃わない現状がありました。話し合いを重ね、ルワンダの子どもたちの意向も聞き、子どもたちは文房具の支援活動を始めました。文房具の支援をしたからといって、ルワンダの子どもたちの貧困や不平等の問題がなくなるわけではありません。しかし、子どもたちなりに力になりたいという思いを持ち、行動を起こしたことは高く評価したいです。

後日、文房具が配られて喜びを表現するルワンダの子どもたちの様子が画面から流れました。その映像を、嬉しそうに眺めていた日本の子どもたちの様子が忘れられません。

自分たちの日常にも目を向けた子どもたち

その後、子どもたちはルワンダという視点だけでなく、身近な差別や不平等に意識を向けていきます。つまり、学校やクラスでのいじめや差別の問題です。ある児童は、リフレクションに、こう記していました。

> 今日は、自分たちのクラスや学校で不平等はないか考えました。今まで障がい者の人や、ジェンダーの問題とかで考えたけど、学校やクラスで真剣に考えたことがなかったから、みんなと話せてよかった。私は、いじめや差別をされたことがあるし、軽い気持ちでしたこともあると思う。そのことも正直に話せてよかった。SDGs の問題は、ルワンダと日本だけじゃなくて、自分の毎日でもあることが分かった。

日本の中にも SDG-10 の課題があることはわかっていましたが、学校やクラスにもその課題があることに目が向いていなかったと述べています。授業での話し合いを通して、自分が不平等を受けていたこと、していたことにも目を向けました。学級では、定期的にいじめや差別の問題を考え、話し合う機会を設けるようになりました。

担任の私には、ルワンダとの交流を通して、自分たちの身近に存在する不平等や差別の問題に目を向けさせたい、との思いがありました。そこに目を向け、自らの言動を問うことではじめて、学習したことが身になると考えたからです。こうした変化を経て、子どもたちのリフレクションを読むたびに、ようやく子どもたちが自分たちの在り方に目が向いている実感が私にも伝わってきました。

完成させた一枚の壁画

最後に載せた写真は、完成させた壁画をウムチョイーザ学園の生徒が手にしている様子です（右半分を日本の子どもたちが作成、左半分をルワンダの子どもたちが作成）。壁画の作成に当たって子どもたちが考えたテーマは「平和と平等の虹を架けよう」です。大きく描かれた虹は、日本とルワンダがつながることをイメージしています。過去に自分たちの学校に描いた壁画でも、大きな虹が描かれていました。その虹がルワンダにもつながってほしいことをイメージしたものです。

持続可能な社会づくりに向けて、人や国の不平等について考え、行動した子どもたち。単なる国と国の不平等ではなく、自分たちの日々にもその課題があり、それに向き合うことが大切であることに気付きました。子どもたちが壁画に描いた平和と平等の虹が、心にも描かれていくことを願っています。貴重な機会を頂いた「ジャパンアートマイル」の皆様。そして交流を進めてくれたウムチョムイーザ学園の竹本様はじめ生徒、スタッフの皆様に、心から感謝を述べさせて頂きます。大変にありがとうございました。〔**主幹教諭　細谷邦弘**〕

*本実践は、一般財団法人ジャパンアートマイルの「アートマイル国際協働学習プロジェクト」に参加して行った。国籍の異なる小中高校 2 校の児童、生徒が協力して「環境保全」や「平和」など協働的に学び合い、学習の成果として1枚の壁画を共同制作することで、これからの時代を「生きる力」を育てることをねらいとしている。

*本実践には、「ユネスコスクール SDGs アシストプロジェクト」の助成を頂いた。

*本報告は、細谷邦弘（2023）「学校丸ごとリフレクション～リフレクションで子どもも 教師も学校も変わる～」（教育報道出版社）をもとに作成した。

アートマイルの HP はこちらから。（現在、プロジェクト参加校を募集中です。締め切りは 2024 年 4 月 19 日です）

http://artmile.jp

https://www.edu.city.yokohama.lg.jp/school/es/minamiyoshida/

横浜市立南吉田小学校

創設：1905 年
ユネスコスクール未加盟校

多文化共生の学校づくり

児童の半数以上が海外 22 の国や地域につながる子どもたちです。多言語での落語発表会や世界の遊びを紹介する催しなどを通じて、子どもたちのつながる国の言語や文化を全校児童に知ってもらっています。子どもたちがそれぞれの言語でアナウンスする運動会は、「東京 2020 みんなのスポーツフェスティバル」で優秀賞を受賞したこともあります。子どもたちが保護者の国の言語を学ぶ母語教室も開かれています。

＊　南吉田小学校はユネスコスクールではないのですが、その先進的な多文化教育の取り組みをご紹介いただくことで、新しい時代のユネスコスクールのあり方を考えるきっかけを作っていただければと、特別に発表していただきました。(実行委員会)

1　学校概要

横浜市立南吉田小学校は、2023 年 4 月現在、全校児童 620 人の半数以上が外国籍または外国につながる児童（以下外国籍等児童）で、つながる国や地域は 22 におよぶグローバル化の進んだ学校です。2010 年代を通して外国籍等児童の在籍割合が 34%から 58%へと急激に増加しました。その背景には、学校が都心部に近く利便性が高いことや、中華街に近いことなどがあげられます。国籍別では中国籍児童が多数を占めますが、韓国、フィリピン、タイ、ベトナムなどアジアの国々につながる児童や、近年はイスラム圏からの編入児童も増えています。

2022 年にコロナによる入国制限が緩和されたことで一時停滞していた国を超えての移動が活発化し海外からの編入児童が急増しています。学校では、増え続ける外国籍等児童の日本語教育と多文化共生教育に力を入れ、学校教育目標の一つに「多様性を尊重できる子ども」を掲げ「誰一人取り残さない」をモットーに様々な取組を行っています。

2　日本語教育

海外から編入した児童はまず横浜市日本語支援拠点施設「ひまわり」（通級の施設）に通い初期日本語指導を受け、日本の学校生活について理解していきます。並行して、学校でも国際教室で初期指導を受けて、サバイバル日本語を身に付けていきます。「ひまわり」卒級後は、学校の国際教室と横浜市日本語教室での指導を受け日本語の力を高めていきます。GIGA スクール構想により、一人一台 PC（GIGA 端末）がやってきてからは、積極的に指導に活用しています。写真や動画、ひらがな、カタカナアプリ、デジタル教科書など日本語が十分でない児童のサポートツールとして役立っています。

初期指導の期間は日本語の習得状況を見て判断します。多くの児童は半年～ 1 年で初期指導を卒業し、学年付きの国際教室での指導に移ります。この段階で日常会話は概ね分かるようになっているので、日本語指導は終了と考えがちですが、そうではありません。在籍学級での学習に参加するための学習言語を習得するにはさらに 3 年～ 5 年ほどかかるという研究もあり、しっかりと日本語指導を継続することが大切です。

学習言語を習得するために本校では各クラスの国語の時間に国際教室で並行指導を行い、徐々に学年相当の学習内容を理解できるようにしていきます。算数や理科、社会、道徳や特活などの時間は在籍学級で一緒に学びますが、教師の説明を通訳したり学びを補助したりする外国語補助指導員や母語支援ボランティア（ともに横浜市教育委員会の事業）が教室に入り込みサポートします。サポートが入らない時には、教室にいる、日本語も母語も分かる児童が助けてくれます。

3　多文化共生教育

本校では多文化共生教育にも力を入れています。「笑顔で結びつなげよう南吉田」を合言葉に、国や言語、文化の違いを超えて認め合える子どもの育成を目指し、様々な取組を行っています。

6 か国語のアナウンス（日本語、英語、中国語、韓国語、タガログ語、タイ語）で始まる運動会では、開会式で民族衣装を着た子どもたちがトーチをリレーし、聖火台に火を灯します。校舎の壁面にはつながる国や地域全ての旗が掲げられ、もはや万国旗は必要ありません。運動会はオリンピックの精神を体現しているとして「東京 2020 みんなのスポーツフェスティバル」で大会組織委員会から優秀賞を受賞したこともあります。多文化共生を象徴する行事として保護者、地域にもすっかり馴染みのイベントとなっています。

夏休み国際読書会は、多言語での本の読み聞かせ会で、子どもたちに人気のイベントです。南区多文化共生事業を活用し、みなみラウンジや韓国総合教育院が講師を紹介してくれます。日本語、中国語、英語、タガログ語、韓国語などで本を読んだ後、その国の遊びを紹介してくれます。

ICT を活用した初期指導

夏休み国際読書会

運動会のトーチリレー

児童会の合言葉

この他にも、多言語落語発表会や世界の遊びを紹介するつながる国の遊び集会、餃子パーティーやキンパづくり教室などの催しを通じて、子どもたちのつながる国の言語や文化にふれる機会を数多く行っています。子どもたちが保護者の国の言語を学ぶ母語教室も開いています。

どの取組も学校だけではなく、PTA（育友会）、地域協働本部をはじめ、行政や横浜市国際交流協会が運営するみなみ市民活動・多文化共生ラウンジ（みなみラウンジ）、横浜国立大学等との連携で、地域人材の支援を得て行っています。

保護者、児童を対象に実施している学校評価アンケートでは「国や文化の違いを超えて認め合う気持ちが育っています」という質問に、9 割近い保護者が肯定的な回答を寄せています。児童アンケートでも同様の結果が出ており、本校の取組が成果をあげていることが分かります。

「私は日本に来る前はとても不安でした。日本語が全く分からないのでいじめられるかと思っていました。不安な気持ちで南吉田小に転校してきました。しかし、私が一人でいたときに何人もの友達が近づいてきて遊びに誘ってくれました。嬉しかったです。」これは外国人児童が転入当初を振り返って書いた作文です。この作文からも「笑顔で結びつなげよう南吉田」の合言葉が浸透し、国籍や言語を超えて相手を尊重しようとする心が育っていることがうかがえます。

4　おわりに

令和 4 年度学校基本調査によれば全国の小中高・特別支援学校等に在籍する外国人児童生徒は 127,190 人で 10 年前の 1.65 倍に増加しています。外国人児童生徒数の増加に伴い日本語指導が必要な児童生徒数も増加しており、令和 3 年度に公立小中高・特別支援学校で指導が必要とされた人数は 58,307 人（日本国籍含む）で前回調査（H30）より 7,000 人以上増えています。

令和 3 年 1 月の「令和の日本型教育の構築を目指して」（中教審答申）には、増加する外国人児童生徒等への教育の在り方について「外国人の子供たちが共生社会の一員として今後の日本を形成する存在であることを前提に，関連施策の制度設計を行うことが必要」と明記されています。

本校に在籍する外国籍等児童の多くは日本人児童と共に将来日本社会の一翼を担う人材になると期待されます。私たちは、国籍や言語に関わらず全ての児童が自らの可能性を発揮して、よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身に付けられるように「あきらめず、誰一人取り残さない」を合言葉に今後も支援を続けていきたいと考えています。　〔校長　金子正人〕

https://www.otsumanakano.ac.jp/

大妻中野中学校・高等学校

創設：1941 年
ユネスコスクール認定：2022 年

チームプロジェクト型の地球市民教育 ～学ぶ・つなぐ・行動する

大妻中野フロンテイアプロジェクトチーム（FPT）は、中学 2 年生から高校 2 年生までの有志による学年横断型の課外授業です。本校が SGH アソシエイト校の認定を受けた 2015 年に創設され、今年度で 9 年目を迎えます。昨年度はメンバー 24 名が「共生社会チーム」「防災減災チーム」「ゴミ環境チーム」「子ども教育チーム」「女性ジェンダーチーム」にそれぞれ所属し、各チームの企画を、全校生徒、教職員、保護者、地域の人々にも参加を呼びかけ行動してきました。FPT の活動は微力ではありますが、自分たちの企画が実現したときの喜びが「地球市民」として社会の課題に挑もうとする中高生の勇気を生み出すと考えています。

大妻中野中学校・高等学校は、建学の精神「学芸を修めて人類のために」、校訓「恥を知れ」に基づき、「自律」「協働」「貢献」の 3 領域を基本的な柱とした地球市民教育を「大妻中野グローバルセンター」を基幹部署としてホールスクールアプローチで取り組んできました。

2002 年に海外帰国生を受け入れて以来、現在では全校生徒の 1 割を超える海外帰国生が在籍し、すでに多様性を受容する土壌が育っているという基盤の上に、2015 年に文部科学省の SGH（スーパーグローバルハイスクール）アソシエイト校として、グローバル・シチズンシップを育てる取組みを開始しました（現在は、SGH ネットワーク校として取り組みを継続中）。2019 年にユネスコスクール加盟国内審査に合格したことを受け、2022 年に正式にユネスコスクールに認定されました。

「大妻中野グローバルセンター」はセンター長の水澤孝順教頭を中心に、外国人教員 5 名、日本人教員 3 名、専属事務員 1 名からなる校務分掌です。ユネスコスクールの 3 つの柱、「地球市民」「持続可能なライフスタイル」「異文化理解」を探究する教育活動を、学校行事、教科授業、課外授業、各種海外留学プログラム等を通して体系的に行い、1 年間の活動を集約し、その成果を『大妻中野グローバル教育レポート』にまとめてきました。

第 4 回ユネスコスクール関東ブロック大会で発表させて頂いた大妻中野フロンテイアプロジェクトチーム（以下 FPT）は、大妻中野におけるホールスクールアプローチの一例です。FPT は中学 2 年生から高校 2 年生までの有志による学年横断型の課外授業です。本校が SGH アソシエイト校の認定を受けた 2015 年に創設され、今年度で 9 年目を迎えます。2023 年度はメンバー 35 名が「多文化共生チーム」「中野まちづくりチーム」「ゴミ環境チーム」「生物多様性チーム」「女性ジェンダーチーム」にそれぞれ所属し、各チームの企画を、

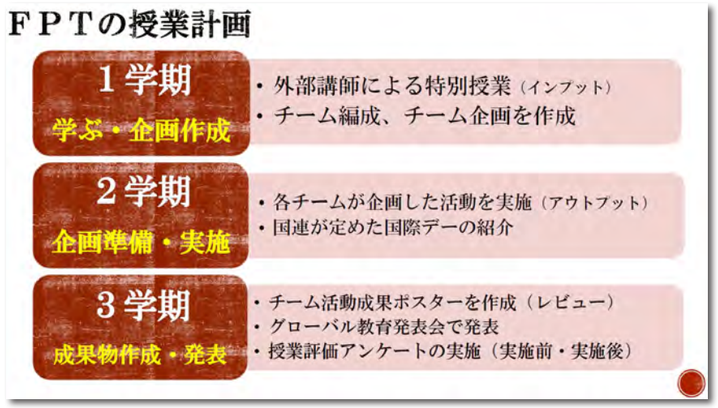
全校生徒、教職員、保護者、地域の人々にも参加を呼びかけ行動しています。

FPT では、1 学期は「学ぶ（インプット）」、2 学期は「企画を実施する（アウトプット）」、3 学期は「成果物を作成する（レビュー）」という流れで授業を実施しています。

これまで、国連 UNHCR 協会とのコラボ企画「難民映画祭」を実施し募金を集める活動、ファーストリテイリング社とのコラボ企画「届けよう! 服のチカラプロジェクト」で近隣地域の保育園にも協力してもらい子どもの古着を集める活動、FPT オリジナル企画として「中野ゴミ探検隊（ゴミ拾い）」「防災グッズ作成ワークショップ」「中野区長とのタウンミーティング」を全校生徒に呼びかけて実施する活動などをしてきました。さらに、自分たちが活動して学び得たことを、ポスターにまとめたり、校内で発表したりと伝えることも大切にしています。

FPT に参加した生徒は、クラス活動や教科学習においてリーダーシップを発揮し、大妻中野全体に地球市民マインドを浸透させる役割を担っています。FPT の活動は微力ではありますが、自分たちの企画が実現したときの喜びが「地球市民」として社会の課題に挑もうとする中高生の勇気を生み出すと考えています。

〔 社会科教諭・
フロンティアプロジェクトチーム担当　大西麗〕



FPT に参加した生徒の感想

中学 3 年生　O.K.

フロンティアに参加して成長したことは、自分の世界が広がったことです。フロンティアの企画を通して自分の知らなかった世界に出会うことができ、見える世界が変わったように感じています。「知ること」の大切さもこの 1 年で実感しました。社会問題などについて知識を蓄えられたことで自分の言葉に深みが生まれたと感じています。知ることが社会貢献につながるのだということを、フロンティアを通して学んだのでこれからも学び続けていただきたいと思います。

高校 1 年生　N.M.

フロンティアでは自分の意見を整理して表明することができ、視野がさらに広がったと感じました。グループの固定されたメンバーだけでなく、ランダムのメンバーでもディスカッションをするので、自分の意見を広く共有できて良かったです。また、自分から意見を言わなければならない環境があるのはとてもありがたいと改めて感じました。誰かから促されるのを待つだけでなく、自分から意見やアイデアを出す率先力が必要だと思いました。フロンティアは活動する範囲が限られていると感じたので、学校外にも積極的に発信していけたら良いと思いました。外部から刺激を受けるだけでなく、自分たちから社会に刺激を与えていくことも重要だと感じました。

高校 2 年生　S.M.

私は高校 1 年からフロンティアに参加しましたが、2 年間の活動を通して成長できたことがたくさんあったなと感じています。一番の成長は「自分から話す」ことです。私はもともと自分から発言する積極的なタイプではなかったのですが、先輩や後輩から多くのことを学び、自分の意見をしっかり伝えるということができるようになりました。今年度は特にチームリーダーとして活動し、不安なこともたくさんありましたが、チームのメンバーの意見にしっかり耳を傾け、自分なりに意見をまとめて指示を出す、ということが少しでもできるようになったのではないかと感じています。

湘南学園中学校高等学校

創設：1933 年
ユネスコスクール認定：2013 年

中高生からの呼びかけ「生理を知ろう」～生理を通して多様性の理解へ

生理やLGBTQ+の学習会を開催、自由に使える生理用品を設置するなど、自分たちの身近なことからジェンダーについて考える生徒の自主活動〝Over The Rainbow Project〟。他にも環境、貧困問題を扱う自主活動があり、さまざまな視点から「誰もが生きやすい未来」を考えます。中高一貫校の強みを活かし、想いは先輩から後輩へと引き継がれています。

まほ　Over the rainbow Project は、2022 年の 3 月の国際女性デーに、生徒たちが学年集会でメンバー募集を呼びかけ立ち上げられました。LGBTQ +に対する偏見が、社会に根強いことに気付いたことから始まりました。当事者の方々が生きやすい社会になるきっかけを、という思いのもと活動しています。

みつき　沢山の知識をえたいと思い、社会的にもLGBTQ +が広まっていて興味が湧いたことも入るきっかけです。悩んでいる当事者は湘南学園にもいると思うので、まずは学校内から活動をしています。

望木　活動報告をします。校内の女子トイレに生理用品を設置出来ました!緊急時のためだけではなく、ジェンダー平等を目指すためにも取り組んでいます。生理は女子に当たり前にあるものなので、トイレットペーパーのように当たり前に生理用品も設置したいと考えました。学校側と協議して、設置場所や収納ケースを選んだりしました。学校側と私たちの意見が違うところがありましたが、学校側の理解が得られたことで、意見の言いやすい学校だなと実感しました。

みつき　同時にサニタリーボックスの自動化も進め、業者の方との打ち合わせも行いました。最初は減りが少なかったのですが、約 2 ヶ月後からは大幅に増えました。私自身、設置されたばかりの時は気が引けて生理用品を使っていなかったのですが、利用してみたら、便利さに気付き今も利用しています。

生徒の反応

- 生理用品代が浮いた。
- いつ生理がきても生理用品のことで心配する事が無くなった。
- カバンから出す手間が省け、人の目を気にしなくて良くなった。

このような言葉から、女の子達のストレス軽減にも繋がっているといえます。また、生理用品の設置により、女の子だけが自分自身で生理用品を準備しなければならないという不公平さが解消され男女間の公平さが少しでも実現したと考えます。今の湘南学園では〝生理用品の設置は当たり前、という目標の達成に近づいていると考えています。

けんと　昨年度開催した「生理セミナー：生理は天然色」を、生理用品を作っているベアジャパンさんをお招きして今年も開催しました。昨年度は高校 2 年生のみ対象でしたが、今年度は中 1 から高 3 に対象の範囲を広げました。2 ターム式で男女別でセミナーを行い、最後に男女合同でディスカッションを行いました。

〔セミナーの様子の動画〕

ふーちゃん　女子編の第一ターム（ディスカッション）では、女子同士で色々な生理用品を触ってみたり、生理についてディスカッションしました。女子同士でもがっつり生理について話し合うことは中々ないので、自分以外の人の生理事情を知るいい機会になりました。（身体的な）同性同士、当事者同士で話すことでしかわからない話もできてよかったです。第二ターム（講演セミナー）では、生理の個人差について、海外の生理用品について、PMSや更年期など生理にまつわる色々なお話が聞けました。生理の当事者である私たちでも知らないことがたくさんあり、体験したことがない男子が知らないのも当然だなと感じ、改めて男子もセミナーの対象にする意味を実感しました。

須藤　男子編では、第一タームに講演セミナーを、第二タームには生理用品を買いに行く体験「はじめてのおつかい」を行いました。講演セミナーでは、生理についてのお話だけでなく、ナプキンを実際に広げたりタンポンを開けて水につけたりなどの体験もありました。タンポンを観察するのは初めてのことだったのですが、最初細かったものが水分を含むと体積が増えて驚きました。「はじめてのおつかい」では、お題の状況に合わせて実際にドラッグストアに買いに行く企画でした。僕が同行した班の人たちは、生理用品コーナーではなく介護用品コーナーに行ってしまうなど、普段慣れていないのだろうなと感じる場面がありました。

ゆうかちゃん　第三タームでは、男女合同でディスカッションを行い、男子が買ってきたものの発表も行いました。「生理中の女の子に気の利いたものを!」というお題で、〝きのこの山〟を買ってきてくれた男子は、「甘いものがいいと思ったが、ただのチョコだと肌荒れをするかもしれない。折衷案で〝きのこの山〟にした」と言っていて、色々考えてくれたことが分かりとても嬉しかったです。参加したみんなでディスカッションを行うことで、新たな視点を知ることができてとてもよかったです。実際に対話をすることでしか得られない、感じられないことがあるなと身をもって感じることができました。

ゆいちゃん　私たちの活動を広めるために、ユネスコアシストプロジェクトからの助成金でステッカーを 2 種類作成しました。良いねマークのステッカーの方は、親指にレインボーのネイルがされており、LGBTQ +について広く知ってもらおうとするものです。洗剤の方のステッカーには ”Think outside the box” と書いてあり、既成概念にとらわれずに考えるということは、従来とは異なる、または新しい視点から考えるということを意味しています。オープンキャンパスや学校説明会、またプロフェスというプロジェクト活動を宣伝するイベントで配布しました。

まいこ!　今後の予定として、昨年度に続き、LGBTQ +を知る会を行いたいと思っています。また、今は一部のトイレのみにしか設置していない生理用品を、体育館の近くのトイレなどにも拡大し、加えて生理用品の種類を増やしたいと考えています。さらに、ステッカー以外にも私たちの活動を広めるグッズの作成も考えています。これからもみんなが過ごしやすい学校生活のサポートをできるように頑張っていきます

まほ　今はまだまだ、ジェンダーについて気軽に話すことができなかったり、正しい知識が浸透していなかったりします。ジェンダーに限らず、「話すこと」「知ること」は重要です。対話をすることで、自分とは異なる意見や新しい知識を得ることができ、自分の考えの幅が広がると考えています。私たちの活動を通して、ジェンダーについて「話すこと」「知ること」ができる場所を提供していきたいと思っています。誰もが生きやすい社会になれるよう、まずは身近なことから取り組んで、自分たちが変わっていこうと活動しています。ご清聴ありがとうございました!

感想

高校 2 年生　女子
学校外でのプロジェクト活動に参加するのは初めてのことで杞憂もありましたが、発表の後は大きな達成感を得ることができ、参加してよかったと感じました。想像以上にたくさんの方々の前での発表であったため、緊張もありましたが、みなさん私たちの発表に耳を傾けてくださって嬉しく思いました。 他校の高校生や、大学生と行うグループワークはとても新鮮でした。それぞれの興味関心から「つながり」を見つけ、新たなテーマを生み出すのがとても楽しかったです。

高校 2 年生　男子
我々の発表を通じて普段中々聞かない女子のリアルな声を聞いて、ナプキンをトイレに設置することの意義を感じました。また、発表するにあたってどのようなことを言えば聴衆が反応してくれるかなど、自分なりの学びも得られたと思っています。

中学 2 年生　男子
今回の発表を通して男女の意見を交えて考えることができて、よい機会になりました。
女子にしかない意見。男子にしかない意見。
内容がプライベートなことだとなかなか意見交換ができないので、こういう場がもっと増えていったらいいなと思います。
また、このプロジェクトメンバーの男子の存在意義を感じることができて良かったです。

グループワークと各グループからの発表

本大会には、ユース 31 名のほかにスタッフを入れて 160 名の参加がありましたが、あえて講堂を使わず、ICT を活用して 2 つの教室をつなぎ参加者同士の顔の見える交流を目指しました。参加者は、8 人ずつほどのグループに分かれて机を囲み、軽いアイスブレイクで自己紹介することから始めました。その後、実践発表校からの報告を一緒に聞き、「ユネスコスクールの 3 つの柱」のテーマごとにグループワークの時間をもちました。

グループワークでは、テーマごとの実践発表についての感想や、参加者それぞれの教育現場の様子をシェアしあい、発表を聞いてそれぞれ何を持ち帰ることができると思うか話し合いました。すべての発表とグループワークが終わった後には、付箋紙を使うなどしてそれぞれのグループで話し合ったことを模造紙にまとめ、全体に向けてシェアしあいました。

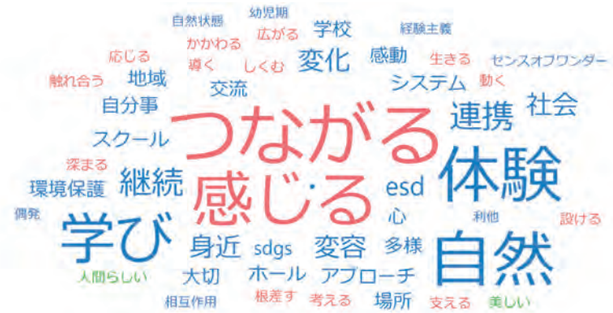
16 のグループからの発表を紹介することはできませんが、模造紙でどんな言葉が使われていたかを視覚化してみたので右のページでご紹介します。付箋紙などにまとめられた言葉を、テキストマイニングツールを使って出現頻度の高いものほど大きな文字になるように示したものです。

＊　ユーザーローカル テキストマイニングツール〔http://textmining.userlocal.jp/〕による分析

Ⅰ　持続可能な開発および持続可能なライフスタイル

（環境教育）

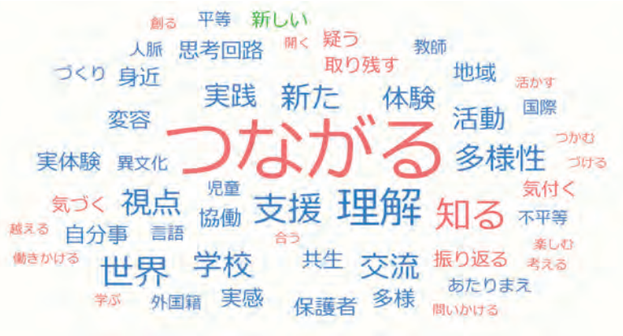
自己と他者との関係を表す「つながる」「交流」「連携」といった言葉が多くみられます。自然、地域、社会とのかかわり、それを「感じる」こと、そうした体験・学びを継続しながら子どもたちが成長し変容してゆく姿を想像することができます。



Ⅱ　異文化学習および文化の多様性と文化遺産の尊重

（国際理解教育・多文化教育）

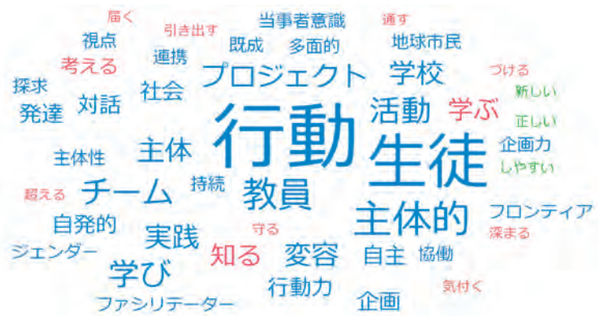
こちらでの「つながる」は海外との交流を通じて世界とつながり、身近な多文化との共生を通じて多様性を理解することをイメージしているようです。誰も取り残さない、開かれた学校・教室をめざして「つながる」ことを大切にする気持ちがうかがえます。



Ⅲ　地球市民および平和と非暴力の文化

（平和・人権・ジェンダー平等教育）

発表校の中学生･高校生たちの主体的な行動、チームとしての協働、連携による実践、プロジェクト形式で若い世代が生き生きと活動し、その活動を通じて生徒だけでなく教員も変容していく様に多くの共感が寄せられました。



パラレルイベント（7月30日 13:30～14：30）

ユースミーティング

大会当日には、神奈川県立有馬高等学校、大妻中野中学校・高等学校、湘南学園中学校高等学校の中学生・高校生が 20 人、活動報告やポスターセッションの発表のために参加しました。その 20 人と東海大学の学生たちで発表時間の合間に集まって、1 時間半ほどの間「ユースミーティング」を開催しました。

司会とファシリテーターを務めてくれたのは、東海大学の学生サークル「ベイジョ・メ・リーガ」メンバーの 4 人でした。ユネスコスクールの高校生たちは、「ユネスコスクールの 3 つの柱」のどんな課題に関心があるのか、それぞれの学校でどんな活動をしているかなどについて、ワークショップの形で話し合いました。

神奈川県のユネスコスクールネットワークは、東海大学と NGO の CRI- チルドレンズ・リソース・インターナショナルとの共催で、毎年「UNESCO ユースセミナー」を開催しています。今回の「ユースセミナー」の参加者たちも、来年度の「UNESCO ユースセミナー」に参加して、できたら実行委員になってもらえると嬉しいです。

2024 年度の「UNESCO ユースセミナー」は 10 月 19 日～ 20 日に東海大学の湘南キャンパスで開催の予定です。

参加者内訳
高校生　20 名
大学生　4 名

UNESCO ユースセミナーってなに？

2015 年から毎年開いている宿泊型の多文化共修イベントです。以下の 3 つの団体が共同で開催してきました。

- 東海大学
- かながわユネスコスクールネットワーク（KAN）
- CRI－チルドレンズ・リソース・インターナショナル

関東圏のユネスコスクールやその他の高校、大学と、外国学校（*）の高校生が 1 泊 2 日で一堂に会し、平和や人権、環境などのグローバルなテーマについて体と心と頭を使って話し合っています。

ユネスコスクールの 3 つの柱の一つは国際理解教育ですが、私たちのユースセミナーでは身近な「多文化」に目を向けることをたいせつにしています。外国学校の高校生たちを招いて開催することで、参加者の文化的多様性をリソースとする「多文化共修」を目指しています。

第 9 回 UNESCO ユースセミナー（2024 年 10 月 19 － 20 日開催予定）のユース実行委員を募集しています。詳しくは以下の HP から。

https://www.u-tokai.ac.jp/ud-global-studies/news/1914/

＊「外国学校」とは、日本のインターナショナルスクールや民族学校の総称です。神奈川県や東京都には多様な外国学校がたくさん開かれており、関東圏の他の県にはいくつものブラジル学校が開かれています。

過去のユースセミナーのチラシ

「第 8 回 UNESCO ユースセミナー」の様子（動画）

https://youtu.be/E707hY3c7xI?si=U9eL0nfyoQADBVod

ユースセミナーのこれまでの歩み（動画）

https://youtu.be/JjxK3wA4lPQ?si=fjeZ3U1j2tUCIrec

ポスター展示・コーナー展示・動画上映など

ポスター展示

湘南学園小学校
6 年生「総合」
〜世界を感じ、未来を創る!!〜

大妻中野中学校・高等学校
知る側から伝える側へ
〜英語だけじゃない！
現代に見るフランス語教育の重要性〜

神奈川県立有馬高等学校
国際交流と SDGs で考える世界平和

東海大学 / かながわユネスコスクールネットワーク / CRI- チルドレンズ・リソース・インターナショナル
第 8 回 UNESCO ユースセミナー
〜ジェンダーとセクシュアリティを理解するワークとダンスと芸術表現の集い〜

芝浦工業大学インカレ
SDGs プロジェクト
〜個別最適な学びと協働的な学びを同時に実現する合同授業〜

一般財団法人ジャパンアートマイル
アートマイル国際協働学習の成果として文化背景が異なる相手と協創した壁画

公益社団法人 2025 年日本国際博覧会協会
大阪・関西万博の概要の紹介と小・中学校に向けたプログラム

資料展示

横浜市立東高等学校
一人ひとりに輝ける場所がある

成蹊学園
サステナビリティ教育研究センター
成蹊学園サステナビリティ
教育研究センターにおける ESD 活動

公益財団法人 日本野鳥の会
海鳥を守るために
〜始めよう脱プラスチック生活〜

特定非営利活動法人
日本ジオパークネットワーク
ジオパークとは?
〜ユネスコスクールの活動への取り上げ方〜

横浜市教育委員会
2022 年度横浜市
ESD 推進コンソーシアム実践報告書

相談コーナー

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)
ユネスコスクール加盟のプロセスや、加盟後の定期レビューについての相談コーナー

動画上映（休憩時間中）

森のようちえん　めーぷるキッズ
1. もあなキッズ自然楽校
2. 100 年先をみつめる保育園プロジェクト

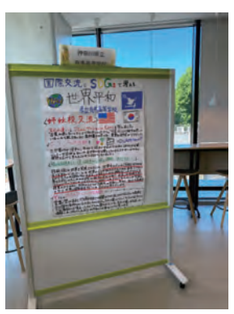
横浜市立南吉田小学校
(日テレ NEWS)
全校児童の 6 割以上が外国ルーツ…
“多国籍小学校”の運動会

湘南学園中学校・高等学校
(TBS NEWS DIG)
男子高校生が学ぶ！〝生理〟の授業
「これが日常茶飯事だとすごく大変……」
男女の〝見えない壁〟なくす社会へ

横浜市立幸ヶ谷小学校
アートマイルプロジェクト
ウムチョムイーザ学園 (ルワンダ) の子どもたちからのビデオレター
(作成：JICA 海外協力隊　竹本栞さん)

JAPAN ART MILE
アートマイル壁画 x 音楽 1
アートマイル壁画 x 音楽 2

東海大学 / かながわユネスコスクールネットワーク (KAN) / CRI- チルドレンズ・リソース・インターナショナル
1. UNESCO ユースセミナー 2015-2022
2. UNESCO ユースセミナー 2023 〝ジェンダーとセクシュアリティ〟



プレイベント (7 月 29 日)

ムーブメントとしてのシュタイナー

世界各地に 1,000 校以上あるシュタイナー学校のうち、30 校ほどがユネスコスクールのネットワークに加盟しています。その中の 3 校は日本のシュタイナー学校です。近年は、日本のシュタイナー学校からの呼びかけで、シュタイナー系のユネスコスクールが交流するオンラインミーティングも定期的に開かれています。

シュタイナーの思想では、ユネスコスクールの「3 つの柱」と親和性の高い考え方が提唱されています。つまり、文化活動における自由、人権における平等、経済活動 (とその結果としての環境保全) における友愛が健全な社会を作るという考え方です。今回、「第 4 回ユネスコスクール関東ブロック大会」のプレイベントとして、全国のシュタイナー学校や幼稚園・保育園と、それらを支える医療関係者、農業関係者が東海大学の湘南キャンパスに集まり、それぞれの社会的取り組みについて「3 つの柱」の視点から共有しました。

参加者内訳 (計：165 名)

オンライン	42 名 (うち登壇者：1 名)
会場	34 名 (うち登壇者：7 名　スタッフ：2 名)
録画視聴希望	89 名

当日プログラム

14:00-14:20	はじめに「シュタイナーの人権思想」 **入間カイ**（那須みふじ幼稚園）
14:20-15:40	第 1 部「学校の取り組み」 ◉ 国際理解・多文化教育 **小貫大輔**（東海大学） ◉ シュタイナー学校が目指す性教育 **村上典子**（学校法人シュタイナー学園） ◉ 地球市民教育 **佐藤雅史**（日本シュタイナー学校協会） ◉ この時代にあってのシュタイナー学校の意味 **小澤周平・鴻巣理香**（東京シュタイナー賢治の学校）
16:10 - 16:50	第 2 部「ムーブメントへのまなざし」 ◉ 医学と教育 **安達晴己**（一般社団法人日本アントロポゾフィー医学の医師会） ◉ 農業と環境にみる多様性と画一性 **假野祥子**（ぽっこわば耕文舎）
16:50 -18:00	第 3 部「プレナム (スピーカーと会場の参加者との話し合い)」 ◉ ムーブメントとしてのシュタイナー　〜課題と展望

第 4 回ユネスコスクール
関東ブロック大会の振り返り

参加者の皆さんのうちメールアドレスがわかっていた 148 人にアンケートを送ったところ、70 人からの回答を得ました。

本大会では、ユネスコスクールの「3 つの柱」のテーマごとに各学校で実践している活動を紹介し、その後参加者全員がグループディスカッションをしました。分科会形式でどれか 1 つのテーマを選ぶのではなく、3 つのテーマすべてについて参加者全員で考える構成にしました。そのことについて「3 つの柱を再認識するきっかけとなった」、「3 つのテーマ全てに参加できたことはとてもよかった。各テーマごとにグループ協議が入ったこと、また同じグループで協議ができたため心理的距離が近く活発な協議になったことは、とてもよかったです」、「分科会ではなく、あえて全員で全てのプログラムを経験し、1 日を通して対話をしていく、という形式がとてもよかったです」など、多くの方からポジティブなコメントをいただきました。

ご発表いただいた各校への感想は、どれも圧倒的にポジティブなものでした。「実践校の具体的な取り組みを聞けたので、何を目指すべきかが見えてきました」、「大学で学んでいることや授業ででてきたワードが実際にこんなふうに行われているんだと理論と実際が自分のなかでつながり新たな学びになりました」、「多様な取り組みについて学ぶことができた」等のコメントをいただきました。他方、「自らが関係する学校においても同じように取り組むことができるかについては不安が残る」、「日本の教職員の労働時間の長さが問題になることがある。多くの校務を抱えるなかで、ユネスコスクール活動に参加するのは、日本の多くの学校にとって厳しいのではないかと思う」などの意見もありました。

今回、あえてグループを「幼保小」と「中高」の関係者に分けました。同じような対象年齢の校種グループとしたのは、共通した悩みや課題をリアルに共有し易いのではないかと考えたからです。「幼保小中高大社の繋がりが課題でもあり、他校種の関係者の意見も聞きたかったです」という意見もあり、今後は、大会のテーマや目的に応じて考えていく必要もあるでしょう。

グループワークの際の人数がおよそ 8 人と多くなってしまったことや、隣のグループとの距離が近くて声が通りづらかったことに不満を感じた方もいたようでした。

ユネスコスクール活動が取り組むべきテーマや課題として挙げられたのは、「人権」、「ジェンダー」、「平和」、「外国につながる子どもを取り巻く社会」、「不登校」、「環境（脱炭素、再エネルギー、海洋プラスチック）」等でした。活動の具体的方法としては、「生徒の主体性を引き出す」、「対話や相互理解を大切にする」、「人間観や世界観を掘り下げる」、「社会のつながりや連続性を整えていく」といった考えが示されました。さらに、学校として取り組めるアプローチとして、「実践事例の収集やそれらの共有を進める」、「社会や地域とのネットワークを活用する」、「ユネスコスクール活動を特定の教員だけが担当するのではなくホールスクールアプローチの体制を整える」、「活動の成果を効果的に広報する」等、現在直面している困難や障壁を乗り越えるための前向きな筋道が提案されました。

全体的な感想の中に「今までユネスコスクールについて全く理解ができていませんでした。体系的にユネスコスクールについて学ぶことができ、とてもスッキリしました。」「他校との交流がなかなか叶わない日常の中で、本大会が学校種、年齢、立場の異なる参加者と交流できる貴重な機会となり新しい視点に気づくことができた」、「心に残るフレーズに触れることができた」との回答がありました。それぞれの学校において特有の課題や悩みがあることを前提としながら、本大会のように直接かつ積極的に議論や意見交換ができる場は、「教育者としての意識をアップデート・アップグレードする大きな鍵になる」との所感もありました。他方、「参加者の多くが学校関係者でありディスカッションの内容が偏っていたかもしれない」との意見もありました。

高校生からの回答に「私は高校生なのですが、学校側と協力しながら今回聞いた話のように海外の学校との交流をしてみたいと思いました。そうすることで実体験を増やし、もっと学年のみんなが外国に繋がる人々に興味や関心を高めたいと思いました」とあり、たいへん励みになりました。

本大会に参加いただいたのはスタッフも合わせて 191 人でした。
その内訳は以下の通りです。

幼保教職員	12
小中高教職員	63
教育委員会	6
大学教職員	32
団体職員（ユネスコ協会など）	21
高校生	20
大学生	18
大学院生	4
その他（保護者など）	15
計	191

神奈川・関東ブロックにおける 地方大会やユースセミナーの歩み

神奈川県では、「お互いの顔の見える関係」を築く目的から、現在の「かながわユネスコスクールネットワーク（略称 :KAN ＊1)」の前身となるグループが 2013 年に結成され、県内のユネスコスクールが集まる地方大会を開催してきました。KAN は、多国籍・多文化の若者の集まる宿泊型イベント（UNESCO ユースセミナー）も、東海大学、および CRI – チルドレンズ・リソース・インターナショナルとの共催で 2015 年以来ほぼ毎年開催してきました。

関東圏には ASPUnivNet（ユネスコスクール支援大学間ネットワーク ＊2）に参加する大学が 4 つあり、2019 年からはそれらの大学の持ち回りで「ユネスコスクール関東ブロック大会」も開催されるようになりました。今回の関東ブロック大会は、その 4 回目となります。

＊1　**かながわユネスコスクールネットワーク（KAN）**
2013 年に「神奈川県ユネスコスクール連絡協議会」として結成され、2022 年からは現在の名称で呼ばれています。略称の"KAN"は、"Kanagawa ASP Network"を略したものです。Yes, we kan! の精神を表現（?）しています。
KAN の運営するメーリングリスト（ML）に参加するメンバーの所属は以下の通りです。その他に、個人として参加してくださるメンバーもいます。他の都道府県からの参加も歓迎します。ML への参加申し込みは以下のメールアドレスまでご連絡ください。
mail　**QYF01463@nifty.com**　望月浩明（事務局長）

＊2　**ASPUnivNet（ユネスコスクール支援大学間ネットワーク）**
ユネスコスクールのパートナーとして、ユネスコスクールの活動を支援する大学のネットワークです。全国 23 の大学が参加し、関東圏からは玉川大学教育学部、東海大学教養学部、成蹊大学、創価大学教育学部・教職大学院がメンバーに加わっています。

年度	神奈川県 ユネスコスクールセミナー	ユネスコスクール 神奈川大会	ユネスコスクール 関東ブロック大会	UNESCOユースセミナー
2013	8/1 横浜国大附属鎌倉中学校			
2014	1/10 神奈川県立有馬高等学校			
2015		8/1 横浜市立幸ケ谷小学校		9/19-20 未来の学校について考えてみよう
2016		8/27 横浜シュタイナー学園		7/29-30 多様化・多文化化する日本の学校
2017		9/3 湘南学園中学高等学校		10/28-29 多様性とインクルージョン
2018		12/15 玉川大学		7/31-8/1 海洋プラスティック問題と私たちの生活
2019			10/5 玉川大学 SDGs 達成に向けた ユネスコスクールと 地域の連携	7/20-21 コスモポリタンな日本とは？
2020				3/20（オンライン開催） 日本のいろいろな学校
2021			8/7 成蹊大学 SDGs の広がり	8/7（オンライン開催） ユネスコスクールと外国学校の 中高生の出会い
2022			7/31 創価大学 平和・人権と 地球市民教育（GCED）	
2023			7/30 東海大学 ユネスコスクールの 3 つの柱	3/26-28 ジェンダーとセクシュアリティを理解する ワークとダンスと芸術表現の集い
2024			10/5（予定） ユネスコスクールと全人教育 ―　若者エンパワメントに 向けた教師の役割	10/19-20（予定）

2024 年度 「第 5 回ユネスコスクール関東ブロック大会」予告

「第 5 回ユネスコスクール関東ブロック大会」は、2024 年 10 月 5 日（土）に玉川大学で開催させて頂くことになりました。テーマは「ユネスコスクールと全人教育 ― 若者エンパワメントに向けた教師の役割」です。

今年玉川学園は創立 95 周年を迎えますが、その建学の理念である全人教育はユネスコの変容的教育（transformative education）と高い親和性があります。これは私たち人間の生き方そのものの変革を求めていくアプローチです。

ユネスコスクールは、2023 年に設立 70 周年を迎えましたが、ESD をはじめとするユネスコ変容的教育の推進拠点と位置づけられており、認知的、社会情動的、行動的スキルを統合した全人的な学びの重要性が強調されるようになってきました。2023 年 11 月の第 42 回ユネスコ総会では「ユネスコ 1974 年教育勧告」の改訂版が採択されましたが、この改訂版においても現在の不確実性の時代に求められる新たな人間像を探究する上で全人的な視野に立った変容的教育が提唱されています。また教師と学習者の関係性の見直しという観点から若者エンパワメントの重要性が強調されています。

これらをふまえ、第 5 回ユネスコスクール関東ブロック大会においては、全人教育の視点から、ユネスコスクールの新たな展開にとってカギとなる若者エンパワメントに向けて教師に求められる新たな役割および課題について多角的に検討してみたいと思います。次世代の持続可能な社会の担い手である若者のエンパワメントを効果的に支援できる教師の姿について、「世界教師デー」（10 月 5 日）に開催される本大会においてご一緒に探ってゆきましょう。

ASPUnivNet 加盟大学はじめ各参加校からの事例提供をお待ちしています。また次世代ユネスコ国内委員会の若者たちもお招きし、地域、学校種、世代を超えた全体での共同討議を行いたいと考えています。ぜひふるってご参加下さい。　〔玉川大学　小林亮〕

第 5 回ユネスコスクール関東ブロック大会

ユネスコスクールと全人教育
― 若者エンパワメントに向けた教師の役割

日時：　**2024 年（令和 6 年）**
10 月 5 日（土）10:00 ～17:00
会場：　**玉川大学　大学教育棟 2014　5 階教室**
（対面を主とし部分的にハイブリッド形式）

主催：　玉川大学教育学部
共催（予定）：　東海大学 / 創価大学 / 成蹊大学 / 次世代ユネスコ国内委員会 / ASPUnivNet
後援（予定）：　日本ユネスコ国内委員会 / 日本ユネスコ協会連盟

「第 1 回ユネスコスクール関東ブロック大会」は 2019 年に玉川大学で開催されました。

戦争は
人の心の中で
生まれるものであるから、
人の心の中に
平和のとりでを
築かなければならない。

（ユネスコ憲章前文：1945 年 11 月 16 日採択）

国際連合教育科学文化機関（ユネスコ）は、未曾有の災禍をもたらした第二次世界大戦への反省から「平和は人類の知的及び倫理的連帯の上に築かれなければならない」という精神に則って誕生しました。

1953 年に発足した ASPnet（Associated Schools Network）は、ユネスコの理念を教育の場で実践することを目指した国際的な学校ネットワークです。加盟校同士が活発に交流し、生徒間・教師間で情報や体験を分かち合い、地球規模の諸問題に対処できるような新しい教育内容や手法を開発することを目的としています。日本の学校は、その発足当初からメンバーに加わっています。

15 か国 33 校からスタートした ASPnet ですが、近年では世界 182 か国で 12,000 校以上が加盟して活動しています。

日本では、ASPnet への加盟が承認された学校を、「ユネスコスクール」と呼んでいます。2023 年 3 月現在、国内では 1,115 校の就学前教育・保育施設、小学校・中学校・高等学校及び教員養成系大学等がユネスコスクールとして活動しています。加盟申請における国内審査を終えてユネスコ本部に申請中、ないし申請を行う段階にある学校は「ユネスコスクール・キャンディデート校」と位置づけられ、この時点からユネスコスクールの国内ネットワークに加入します。

第 4 回ユネスコスクール
関東ブロック大会報告書：
ユネスコスクールの 3 つの柱
2024 年 1 月発行

発行：　東海大学ユネスコチーム
259-1206
神奈川県平塚市北金目 4-1-1
tel.　0463-58-1211
E-mail:　unesco@ml.tokai-u.jp

ユネスコチームメンバー（あいうえお順）

池谷美衣子	スチューデントアチーブメントセンター
岩本泰	教養学部
内川明佳	国際学部
小貫大輔	国際学部
木戸啓絵	児童教育学部
小坂真理	教養学部
二ノ宮リムさち	スチューデントアチーブメントセンター
前田晶子	児童教育学部

編集

小貫大輔	東海大学国際学部
内川明佳	東海大学国際学部
望月浩明	かながわユネスコスクールネットワーク

デザイン
橋口博幸

表紙イラスト
橋口由紀